和歌二神

特別
イ 4
3163
87

貴
14
3163
87

和歌三神

住吉大明神

来やさむき衣やうたきうこそだのゆきあひろまよりおやあらん

玉津島大明神

立くらり又とは世ゝあとこゝろ和のうらあく

人麿大明神

千ちはやぶるあしのうらなみ踏うたれゆく舟そうそ

二十六人奇伽

た　榜女人磨

みのくとあしのうらゝ弱音うしまかりぬゆく毎そ

右　紀貫之

榜ちる木ゝたちゝ風もさむゝで宮もとゝ雪そふりける

た　允河内躬恒

いづくとも春のいりはつるくもゝ足ゝの山ゝ雪ふる

右　伊勢

三輪の山いかなるゝとしつもりぬゝとたつねる人とあらしとゝ

た　中納言家持

長乃野うしあさうきてはの書しひみそのがありう我人は志きつ
右　山邊赤人
つくれうしに沒うちうらまだ
左　在原業平
花乃中に寄うて桜のかうりそば長乃人はのどけかりけり
右　僧正遍昭
寄うちうはかれてしうもむで玉乃つがううと為てうやあり人
左　素性法師
ふううなだ柳さううとこ沒りぜて孤たうの乃みきりうり
右　紀友則

月ざれはさうはの沒ぶ乃川ぐりぐり友海どうしてちどり鳴なり
左　猿丸太夫
書とは芸寄うまさとこううはる山中よりたぐつうあくとよぐと名うれ
右　小野小町
うびぬまだ身をうれ乃まの根そううてきそうあうはいちと
左　中納言兼輔
うしうあの乃けゆくまうはうあ乃みのれ雲はふううとそき
右　中納言朝忠
あううう乃寄うてしうあ乃九ぞ中うくうよ人我と身をうううみ
左　中納言敦忠

いかばかりみちひろのさかゆくいろかなるべき

左　　藤原高光

かくばかりかぎりなくかなしかりしかのよのなかのつきかな

右　　源公忠朝臣

ありやなしやとかなしかりしかのときのつきかな

左　　土御門内大臣

ふるさとのかべのこまつのなかりせばよよのかたみをいかにせまし

左　　斎宮女御

あとのちりかぎりなくしかりしかのときのつきかな

右　　大中臣能宣朝臣

一ふしにちとせをかけてかりのよのつきをまちてぞ君をみまし

左　　藤原敦忠朝臣

秋きぬとめにはさやかにみえねどかぜのおとにぞおどろかれぬる

右　　源宣之

風をいたみ岩うちかけるたきのおとはたえてのちもなほきこえけり

左　　源宗于朝臣

常盤なる松のいろをば人とはばいまいくよのみどりなるらん

右　　源伝明朝臣

君しをもとめにゆくとあるかぎりはいかばかりかは君をしるらん

左　　藤原清正

天満宮にまゐりてのうたに

右　源頼

水の面にうつりてすみなれぬる秋の月のかげ

左　藤原奥風

たぶ秋をまつる人まつ高砂の松とむすびのかなるよ

右　結原之浦

林の紅葉はしぐれの雨にぬれ浅茅の原の秋の夕暮

左　坂上是則

こ苔の下の山のもみぢ葉つもりもみぢ葉つもりもみぢ葉

右　藤原之直

咲ぬるかりの宿の山里の外の花をかすみにさそはれぬ

左　三条院女房人左近

岩橋のうへ白のちぎりを嘗べ〜あるうべ〜秋の神

右　藤原仲文

雲の内の月のひかり秋待ぬるいづくよりいでぬ夜の月

左　大中臣能宣

よとともにすでかぎれる松とくらべ君よひろまて万代やへん

右　壬生忠見

風ぐるとをなるもみぢ葉日数をたく葉の日よりはをたる

左　平兼盛

しられけり秋のさこうしきて地にはもとゆひの露ぞありける

右　中務

秋のせれうてつゝもえもえぬ萩の葉ずゑハ音ハしてまし

女三十六人歌仙

左　小野小町

思ひつゝぬればぞ人のみえつらん夢としりせば覚ざらましを

右　式子内親王

わすれてハうちなげかるゝ夕べかなわれのみしりてすぐる月日を

左　伊勢

三輪の山いかにまちみん年ふともたづぬる人もあらじと思へば

右　宮内卿

見わたせばふもとばかりにさきそめて花もおくあるみよしのゝ山

左　中務

秋風の吹につけてもとはぬかな荻の葉ならば音はしてまし

右　周防内侍

ちぎりしにあらぬつらさもあふことのなきにはえこそうらみざりけれ

左　殷富門院大輔

何かいとふよもながらへじさのみやはうきにたへたる命なるべき

右　後成恩寺

[illegible]

左　右近

あしたのゆふべの[illegible]月日のあゆみ[illegible]

右　侍賢門院堀河

うれしさやなどかたさんなどうもしん

左　右大将通親卿

[illegible]

右　宣秋門院丹後

[illegible]

左　馬内侍

[illegible]

右　式部卿敦

[illegible]

左　二条院讃岐

[illegible]

右　和泉式部

[illegible]

左

[illegible]

右　小倉殿

ふきこうむ山ぶしの高くはれまりありあるおきつなみそのそで

左　義人右近

泥（やま）ぶしそでぬれまりあやあるまにはるの雨をとどむとて

右　後鳥羽院下野

心にてくくなれそきりくもかことうゑしき乃（ぬ）ゑ

左　家式ア

人〳〵の煙とまりくゆへりなそむつまくき沙（ちり）海のうく

右　弁内侍

おく高き雲ゑのうちにとなりしゑ袖さへぬれく秋ゑまりり

左　小式ア内侍

恨（うら）てとなれてもいとうとくまくくゑ東の月れつくさゑくでハ

右　かね内侍

ゑくせどやとゑりものとゑつふとそゑ〳〵日ゑのちくゑゑりくん

左　伊賀女房

なれ沢ゑくゑ世なゑゑちゑ沢ゑ乃ゑ海のちくやき衣ゑまゑゑ

右　伊勢大輔

ゑこれゑ〳〵その日ゑりゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

左　清少納言

たゑりゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

右　土御門院小宰相

春ごとにながめしかどもあかぬかな月の秋の夜の明

左　大弐三位

こゝろゆく命たのみありあけの月ぞ秋へきうかな

右　八条院高倉

くもれかしなかむるかぎりみなかはゆるかのなかめ

左　高内侍

ひとりぬる人やたれかはたれかきぬ君よ所ゝ

右　後嵯峨院中納言典侍

偽もいつくんぞ人をうらぶるかたもなくてつゝ

左　一宮紀伊

浦なみよ岸あげのたまの漢よ多波たちくゝ乗ぬ

右　式乾門院御匣

知とさゝ思なかりし紀世と云ぶ人の中をそ恋てゝ

左　相模

もゝかはをいつくゝ（き）あ事のゝ心むすびあの乗のトひを

右　藻壁門院少納

それぞゝ身のまゝの命とそやまくゝ立ゝ身をやゝ

七猿和哥　　為友大師

はくくとうゐ花の中とをつにるまーらざるてとまさるあり
へりけり

へんきうぞもいたぞとかなハざるものゝ海をのあるまゝ
つゝとなくいとハざるてそうりんれさたるかゐ世を義と
ゐるゝとへんれぞてそゞめむつゝやへざるてまさることハあ
きけてそのぞみもなられちゝまたてきうぞるそゞみまさるあり
んよハなれはのゝをつゝとを人のあゝきをいそさるぞう

五色和哥　　宗家卿

へんぞきうぞいるぞるうらいのさるうりをかりたざるてそまさる侍り

青　川竹のたうしの名まぐふ谷蓋のまぐれみかくるあをひら
黄　枝くるゑ岸の山吹花ちりてこう経の蓋ゆみあこそらしかる
赤　ちぐれつる蓋ヨ日うげゆみ深くれくとみぐとおろ出蓋の木粘
白　白玉のやくろ蓋のやきさくそくみとつくたきろとあゆみ
黒　むぐ玉のやうのうくみうゆやれぐなれくかいあき床のくろくゑ

五行和歌

木　出ずあり民のうそどのうそのもりまを水山の木くの枝ぐちくれ
火　ふり紀水のうくみさきたる雲の火れひりとなくるちきりたりや
土　つきそりくたりくふをそくぐ行くるものまちるれる四方れ海山
金　蓋さくく日うげぐ白きこ風のくろよものぐ秋るるくものあうゆ
水　りゆあ紀山のちぐくの蓋だりかくるくあのまのくるくあゆ

古今賢女言行寶訓

大中姫ハ允恭帝ノ后ソノ妹ハ衣通姫ナリ河内國茅渟ト云ノ所ニ住ヒ
容顔美麗申ハカリ無シ天皇御寵愛アサカラズ御幸多ビクニ及ケレハ大中
姫奏シ玉ヒケルハ自カ妹姫ニ契玉フヲ露バカリモ妬奉ルヿハヤラ子トモ
御幸シキリナレハ民百姓ノ苦ナリ同シクハ牛車ノ數ヲ留メ玉ヘト申玉フ
天皇御感アリテ其後ハ希ニ御幸アリシトナン衣通姫ハ玉津嶋大明神ナリ
○草香幡槽姫ハ仁德帝ノ御女雄略帝ノ后ナリ天皇葛城山ニ御狩アリシ

時ニ大十ル猪荒出テ多ノ人ヲ追散シケル天皇御前ニアリシ舎人ニ早ク射トル
ベシト詔アリケレバ舎人瞻シタル者ニテアタリナル樹ニ迸ノボリ振ヒ戦キ居タリ
時ニ猪ハ玉躰ヲノガケ来ル天皇弓ヲステ突止メ忽チ踏殺シ玉ヒケリ其
後御狩止テヤノ舎人ヲ死罪ニ行ヘシトノ勅定ナリ舎人悲テ木ニ登リ猪ノ難ヲ
遁レタレドモ又木ニモ刺アリテ命ヲ失フ云フ心ノ哥ヲヨミケリ幡檜姫憐テ
天皇ニ奏シテ云ク君今猪ノユヘヲ以テ舎人ヲ殺シ玉ハヽ君ハ猛キ獣ノ心ニ同
カルヘシト諫玉ヘハ帝スナハチ舎人ヲ免シ歸ラセ玉ヒ御感アリテノ玉フハ樂ヒカナ
皆人獣ヲ狩ケルニ朕ハ諫ノ善言ヲカリヱテ歓リタリト悦セ玉ヒシトナリ
○光明皇后ハ大織冠ノ孫淡海公ノ女聖武帝ノ后孝謙天皇ノ御母ナリ内裏ノ屏風
ニ書セ玉ヒシ事　人清シテ貪キハ常ニ心ヨリ世ヽノ佛モ聖モ是ヲ莘ヨシト

セリ其心常ニ樂ミ限ナシ心濁テ逆ニ樂ヽンハ三千ノ御佛コレヲ悪ミ戒神
明怒ヲ加ヘ玉ヒ見ル間モナシ歎キ者ナラズヤ万ノ事ヲ何トナリ拂尽ヽリシテ
善悪ノ思モナク心ノ光ノ静ナル時佛ノ来迎ニ預ルニヲ有ケル三世ノ仏ノ教ヲ
辨ヘ世ヒヽノ聖ノ心ヲ辨ヘ知ルトモ心ノヽヽニ振ヒヒ人ヲ敬ハズ酒ヲ飲ミ勝負ヲ
好ミ耳ヨリ口ニ噂シ愚ナル人ノミ集メテヲノガ心ノヽヽニ居ル者ハ大悪人ノ最
第一ナリ必世ノ末ニハ角アラン僧俗コフ岐ニ満ヒヽン今世ノ大事ト云ハ別ノ事ニ
非ス上下ヲ合チ已ヲ約ニスルノミ後生ト云ハ直キ佛ノ教ヲ疑ヌコトナリ
○沼土部ノ穴穂部ノ皇女ハ用明天皇ノ后聖徳太子ノ母君ナリ其辞ニ云ク迷ヒ
深キ人ハ吉ト云ヘハ心ヲ心善シ悪ト云ヘハ心ヲ心悪スヨシアシハ戒ニアリテ人ニ
アラズ人ノ言葉ヲカリ用ルヿナカレ

○上東門院ハ一條院ノ后関白道長公ノ女ナリ奈良ノ東圓堂ノ櫻ハ天下ノ名木ナレハ御殿ノ庭ニ移シ植ヘシトテ則チ興福寺ノ別當命ヲ蒙リ急平安城ニ運シメントセシ處ニ興福寺ノ衆徒等大ニ怒テ此ハ我寺ノ霊木ナレハ他ニ渡ス有ヘカラズ假令女院ノ御咎ナニヨツテ衆徒各罪過ニ逢フトモ是ヲ遮留メ別當ハ當寺ヲ追放ヘシト議定シケリ門院是由ヲ聞召テ此朕過リナリ衆徒等別當ヲ恨ミナカレ去ニテモ奈良法師ハ武ク情ナキ者ト聞シニ角テ花ヲ愛スルノ誠ニ風流ノ桑門カナ今ヨリ後ハ櫻ヲ我カ櫻ト名ツケ他ニ移スヿナク枝切ルヿナリ垣ヲ結圍テ守ヘシ則チ伊賀國餘野庄ヲ寄附シ玉ヘリ是ヨリシテ餘野庄ヲ花垣庄ト改メ呼ケリ

○及正帝ノ姫宮アリ雄畧帝コレヲ后ニ定メント戀玉フ時姫君ノ曰ク君常ニ暴強ニシテ怒ヲ發シ玉フ時ハ朝ニ見ル人夕ニ殺サレタニ見ル者ハ朝ニ殺ルナリ今自カ姿モ睛レザルニ徒ニ情ヲ掛玉フトモ若起居言語ニ付テ少ニテモ君ノ意ニ叶ズハ忽チ親ミヲ捨テ玉フヘシ去ニ依テ命ニ從ヒ奉ルヿナク終ニ遁玉ヘリ

○大戯三位ハ後一條院ノ御乳女ニテ紫式部ノ女ナリ其辞ニ云ク世ノ人ノヨク忘ル者ハ第一ニ我身ノ事第二ニ色好第三ニ忠孝ノ道第四ニ病第五ニ貪カリシ時ノ事第六ニ嬉シカリシ時ノ事第七ニ物ワレニ從サル時ノ事第八ニ万情コロ第九ニ後生ノ道第十ニ年ノヨリタルヿナルヘシ

○貞子ハ右大臣内豊公ノ女紀有常ノ女居三ヲ本朝三人ノ貞女ノ内ナリ其辞ニ男子ナラヌ身ノフルヒハ思ヒチヒニアリトモ色外ニ出サヌヲ女トヤ云フベキ唯ニヤ女ハロサガシノ心ノ子リテ清キ男ノ心ニ見ヘニコソハツカシキ者ナラズヤト云ヘリ

○堀川ハ待賢門院ノ女房歌人ニテ神祇伯顕仲ノ女ナリ其詞ニ云ク人ハ已ヲ
正シテ理ニ疎ラヌゾヨシ邪ナル道ニハ人ヨリ思ツク者ナリ已正ケレハ邪ニハドレ
侍ラズ聞テ益ナカランヤハ大様聞ヌカヨキ者ナリ聞テヨキハ琵琶和琴琴春
ノ鶯秋ノ蟲ノ音ト書ケリ

○中納言行平罪アリテ須ノ浦ニ流サレ配所ノ徒然ニ一日小舟ニ棹サシ繪島
ノ浦ニ御網ニ釣ヲ垂テ遊レシ處ニ此嶋ノ海士ノ子トモ水ヲ汲ミ通フ中ニ独リ
美キ女アリ行平ソゾロニ心ヘドヒ此ニ戯レ其方ノヲナゴ宿ハ何クナルゾト有ケ
レバ女コタヘテ白波ノヨスル渚ニ世ヲスグス海士ノ子ナレハ宿モトガメズト云ニ捨
テ何クトモナク歸リヌ行平モ驚テ斯ル田舍ニモ才智ノ女アリケリト感シケリ

○美濃ノ乙女ハ坂入殿ノ女ナリ景行天皇ノ殿ニ御幸ヾシ〻此ノ姫ノ容儀スグ
レテ美シキヲ聞召シ妃ニナサントテ此姫ノ家ニ御幸アリケレバ隠レテ見ヘ奉ラズ
此ニ於テ方便ニ池ニ數多ノ鮒ヲ放テ朝夕タワムレ遊ビ玉フ姫ソノ鮒ヲ見ントテ池
ノ辺ニ出ケルヲ引留テ契ヲコメントノ玉フ時ニ姫ノ曰ク自ハ男女ノ道ヲ望ズ今君ノ
命ヲ背キ難シテ玉タレノ中ニ絶トモ仕カラズ又容ヒケレバ仕ヘ奉リ難シ唯々自カ
姉君ハ坂入姫ハ美容美麗ニ志モ貞潔ナレハ是ヲ後宮ニ定メ玉フベシト佗玉ヒケリ
帝キコシメシテ則チ姉姫ヲ妃トシ若宮七所姫宮六所デキサセ玉ヒトナリ

○晴子ハ平相國清盛ノ室ニ位尼トヨフス桓武天皇十三代左大臣平時信公ノ女ナリ其
辞ニ云ク由有人ノ世ニ無テ智德兼備メリト云ベキニアラデ賤シキ者ノ時メノ人ニ交
リ居テ邪ナル事ノミ聞テ愚ナル如クニモノイラヘシ侍ルヲイヨ〻愚ナルカト思ヒモノ
イヒ散ラハヤメハラ痛ム者ノイトラシキ者ナレ力我ヨリ上ツ方ニハ慎子ドモ過

鮮シ我ヨリ品下リ凡人ノ前ニハアヤシノ言語ニデモ心ヅカヒスベキ者ナリト云ヘリ

○貞子ハ貞信公ノ室ナリ其詞ニ我モ信アル時ハモロ〳〵ノ人皆ワガ兄弟ナリ我レ信ヲ失ヘハ兄弟親子ノ間モ仇カタキノ如クナリ

○天正十一年ニ美濃守信孝幸田彦右衛門尉モロトモニ秀吉公ニ背キテ立籠リタリ秀吉公大キニ怒リ玉ヒ則チ信孝ノ母幸田カ母ヲ生捕リ人質ニ仕直テ其子トモノ降参ヲ待玉ヒケリ幸田カ母密ニ文ヲ認メテ彦右衛門ニ送リテ曰ク凡ソ天下ノ人君ニ忠アルハ天地ノ道ナリ父母子ニ先達ハ古ヘ今ノ理ナリ我君ノタメ家ノ為ニ命ヲ捨ルトモ全ク哀ムヿ勿レ歎ヿ勿レ汝ハ義理ト孝行トノ道ヲ守テ能ク君ニ事ヘヨ母カ難儀ヲ悲テ二心ヲ思フヘカラズト教ヘ終ニ秀吉公ノ為ニ失ハレケリ幸田兄弟母カ遺言ノ皇キ處母ヲ失ハレシ恨ミ何カハタヘン

ベキ目ヲ驚ス合戦メ終ニ討死ニシケリ時人前代未聞ノ女ナリト感シケル

○台ミオ女アリ夫外ノ女ニ契リテ是ヲ追出シケリ妻力ナリ出テ行ントセシ折節風烈シク雨頻リニ降来リケリ夫餘ツレナシト思ヒ暫ノ雨風止テ歸ルヘシト云ヒケレハ妻歌ヲヨミテ曰ク降レハ降レ降ズハ降ラス降バトテ迚モ乾ケル袖ナラハコソト聞ヘケレハ夫大キニ感シサヽ〳〵宿メテ永ク契リケリ

享保十八癸丑年二月九日写之